

平成31年度(令和元年度) 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 城野 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成31年4月18日(木)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

(1) 教科に関する調査(国語, 算数)

主として「知識」に関する問題	主として「活用」に関する問題
・身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力
・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

※全ての実施教科で、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問うようにしています。

(2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

※本校の6年生については、単学級ですので、個人が特定されないように公表の方法については、配慮しています。

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査(国語, 算数)の結果

本年度の結果	国語		算数	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	9.1	65	9.0	64
全国	8.9	64	9.3	67

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> 全体的には全国平均正答率をやや下回っていたが、無解答はほぼない。 読むこと、書くことの領域に関しては、前年度に比べ改善傾向がみられるが、言語の特質に関する問題に課題がみられる。 記述式、短答式の問題に課題がある。
	よくできた問題	目的に応じて文章全体を効果的に読み、解答する問題についての無回答率が0%で、正答率も全国平均並みである。
	努力が必要な問題	情報を相手に正しく伝えるための記述の仕方に関する問題や、漢字の正しい使い方に課題がある。
算数	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> 全体的には全国平均正答率をやや下回っていたが、無解答は全くない。 計算領域、数量関係の領域に関しては、前年度に比べ改善傾向がみられるが、図形領域に課題がみられる。 記述式、短答式の問題に課題がある。
	よくできた問題	棒グラフから情報を読み取る問題や、計算問題について全国平均を上回っている。
	努力が必要な問題	資料の特徴や傾向に関連図けて変化の理由を説明する問題や、計算の仕方を解釈しその性質について説明するなどの記述式問題に課題がある。

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要

質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> 「算数の問題の解き方が分からないときは、諦めずにいろいろな方法を考えますか」という問いに対し、肯定的な回答をした割合は全国平均を上回った。これからも、子どもたちが「分かる・できる」と実感できるような授業改善を継続していく必要がある。 「将来の夢や目標を持っていますか」という質問に対して、肯定的な回答をした児童の割合が全国と比べてかなり高い。自尊感情が高くなってきていることから、児童が将来を展望できるようになってきていることがわかる。 「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という質問に対し、肯定的な回答をしている児童が全国平均を大きく上回った。教師と児童の好ましい関係や、わからないことを気軽に聞くことができる学級の雰囲気がつくられているといえる。 「5年生までに受けた授業で、コンピューターなどのICTをどの程度活用しましたか」という質問に対し、肯定的な回答をした児童の割合が全国と比べてかなり高い。日々の授業における、視覚的支援を意識したICT機器の活用を行っている成果であるといえる。 「朝食を毎日食べていますか」「毎日同じくらいの時刻に寝ていますか」などの、生活面に関する質問に対して、肯定的な回答をした割合が全国平均を下回った。児童の生活実態を把握し改善していく必要がある。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<ul style="list-style-type: none"> 児童が「分かる・できる」を実感できるような、個に応じた支援を取り入れた授業改善。(ワーキングメモリ・アセスメントの活用) 視点を明確にした「振り返り」の時間の設定による、「書く」指導。 視点を明確にした、短い時間での意図的な話し合い活動。

② 家庭生活習慣等に関する取組

<ul style="list-style-type: none"> 本校で作成した「学習・生活の手引き」を配布し、生活習慣や学習習慣について保護者に周知する。 月初めの1週間を「家庭生活・学習週間」と位置付け、各家庭に家庭生活・学習がんばりカードを配布し、基本的な生活習慣の様子を保護者ととも確認して記述できるようにする。また、配布物の裏に「学習・生活の手引き」の抜粋を載せ、保護者に周知する。
--